

佳作

机上の物語の世界

広島県 増田千晴

「あー、おなかすいたあ……。」

3年前の秋。あれは確か、4時間目の理科の授業の時だった。空腹状態が最高潮の時間帯のこの授業では、先生の「ここ重要！」という声は耳を見事に通り抜け、私の頭の中にあるのは今から食べる弁当のことだけだった。

「今日の弁当、中身何かな……。」

私は何を思ったか、理科室の机に、つぶやいた言葉をそのまま書き込んでしまっていた。ようやく終礼のチャイムが鳴ったので、私は机に落書きしたことも忘れて教室へ走って戻った。

次の日。再び授業で理科室に向かった私は、机に着いてみて驚いた。

「弁当かあ。自分は、のり弁当だったよ。」

何と、前日に書いた私の言葉に返事が書いてあったのだ。信じ難かったが、何度見てもそれは自分が書いたことへの返事だった。当時夢見る少女だった私は、物語の世界に入ったようでとても嬉しかった。それから私達のやりとりは何度も続き、たわいもない話で盛り上がりたりした。書き込むときには、机に落書きというよくない行為をしているのを先生に見つからないようにするというスリルに、毎回どきどきした。お互い一言ずつだったけれど、その一言を見るのが楽しくて、いつの間に連鎖したのか、授業も楽しいと思えるようになっていた。

ある日私は思いきって尋ねてみた。

「ところで、あなたは誰？」

これで途切れたらしつこくせず、あっさり書くのをやめようと決めていた私。気になることを聞いただけのつもりだったけれど……やはりそれっきり、返事は来なくなった。

中学時代のことを思い出すたび、あの相手は一体誰だったのだろうと考えたりする。もう知ることはできないけれど、ちょっぴり私の学校生活を楽しくしてくれた君のことを、私は忘れないでいよう。物語のような素敵な世界を、ありがとう。